

非加害女性養育者の児童に対する態度別 被害児童の被害発覚時点年齢分布

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

点(大)とエラーバーは平均値とその95%信頼区間、点(小)は事例ごとの年齢を示す

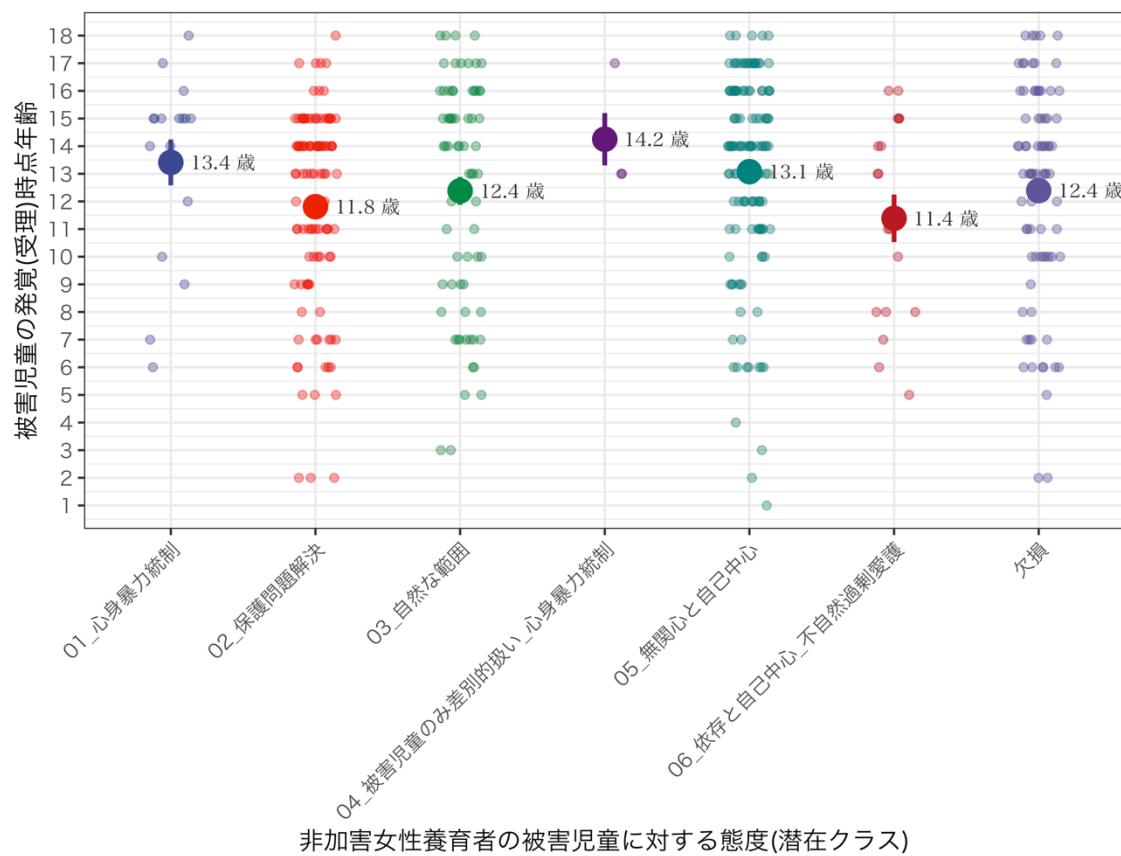


図 15.10 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 被害発覚時点(受理時点)の児童年齢

被害の継続年数についても同様に、肯定的態度や自然な範囲と否定的態度との間に、明確な違いは認められなかった(図 15.11)。なお、被害の継続年数を算出するためには必要であった、「被害の初発年齢」が把握・報告されなかった 112 件については、当該集計からは除外している。

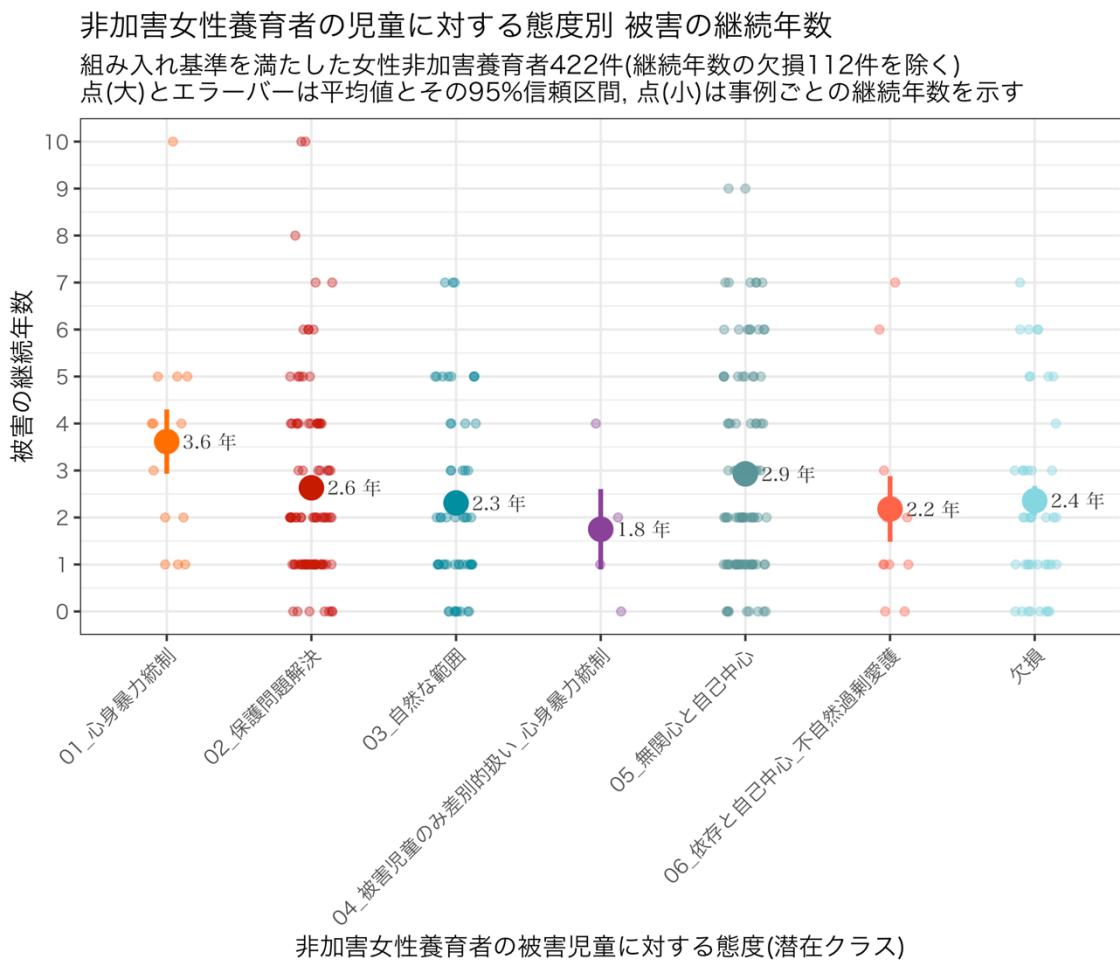


図 15.11 非加害女性養育者子どもに対する態度別 被害の継続年数

続いて、非加害女性養育者の態度別での被害内容の該当率を図 15.12 に示す。非加害女性養育者の被害児童に対する態度によって、被害内容に明確な違いは観察されない。

非加害女性養育者の児童に対する態度別被害内容

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

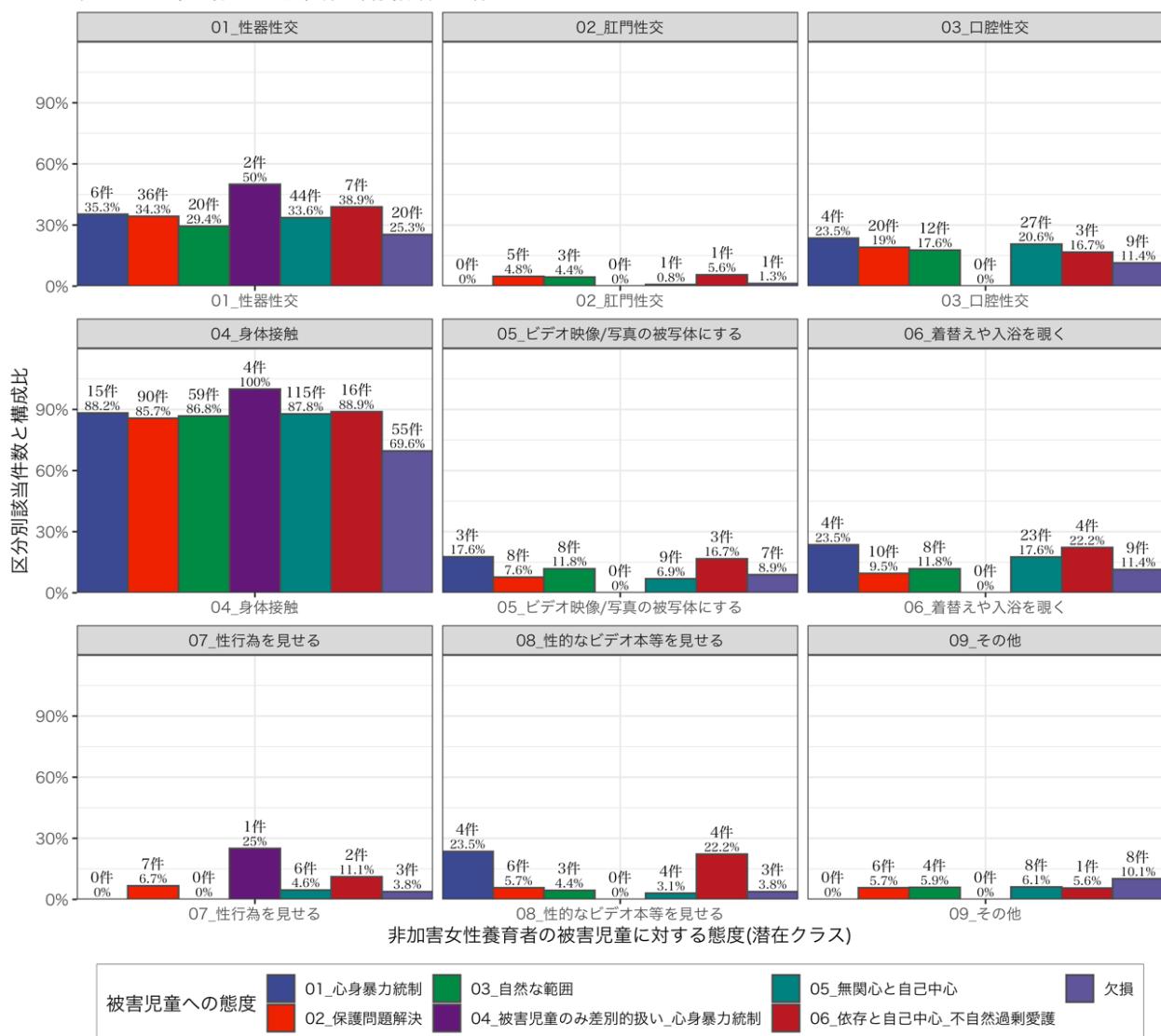


図 15.12 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 被害の内容

被害児童に見られる各種臨床所見に関する集計結果を整理する。まず、「無症状」および「医学所見」への該当状況を、非加害女性養育者の子どもに対する態度種別別で整理した結果を図 15.13 に示す。非加害女性養育者の態度が、「自然な範囲」と形容されるパターンにおいて、「無症状」への該当がやや高い傾向が見受けられるが、全体を総合して、被害児童に対する肯定的・自然な範囲と否定的な態度の間に、両所見への該当率の明確な違いは見受けられない。

非加害女性養育者の児童に対する態度別 無症状・医学所見

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

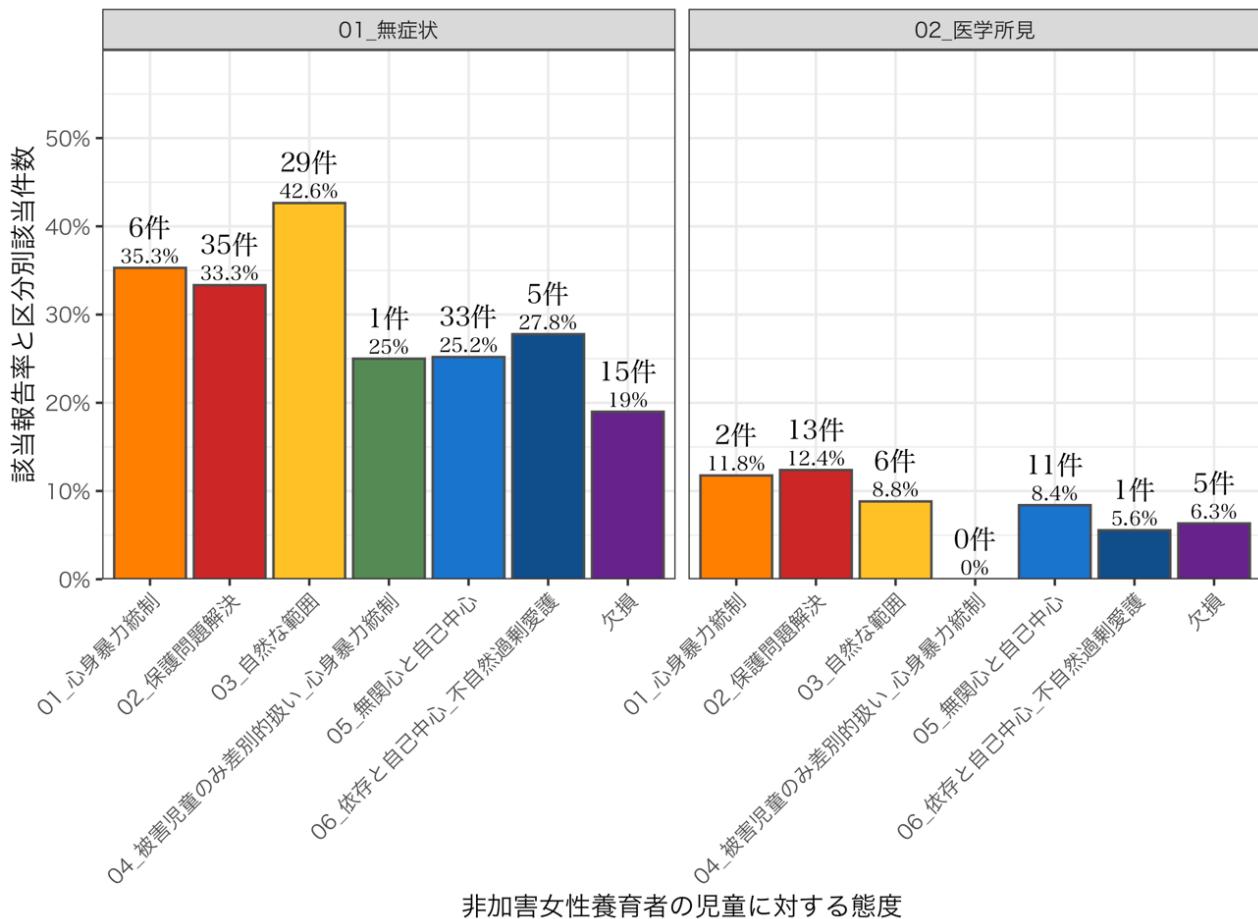


図 15.13 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 無症状所見と医学所見の該当報告率

身体所見への該当率についても同様に、被害児童に対する肯定的・自然な範囲と否定的な態度の間に、両所見への該当率の明確な違いは見受けられなかった(図 15.14)。

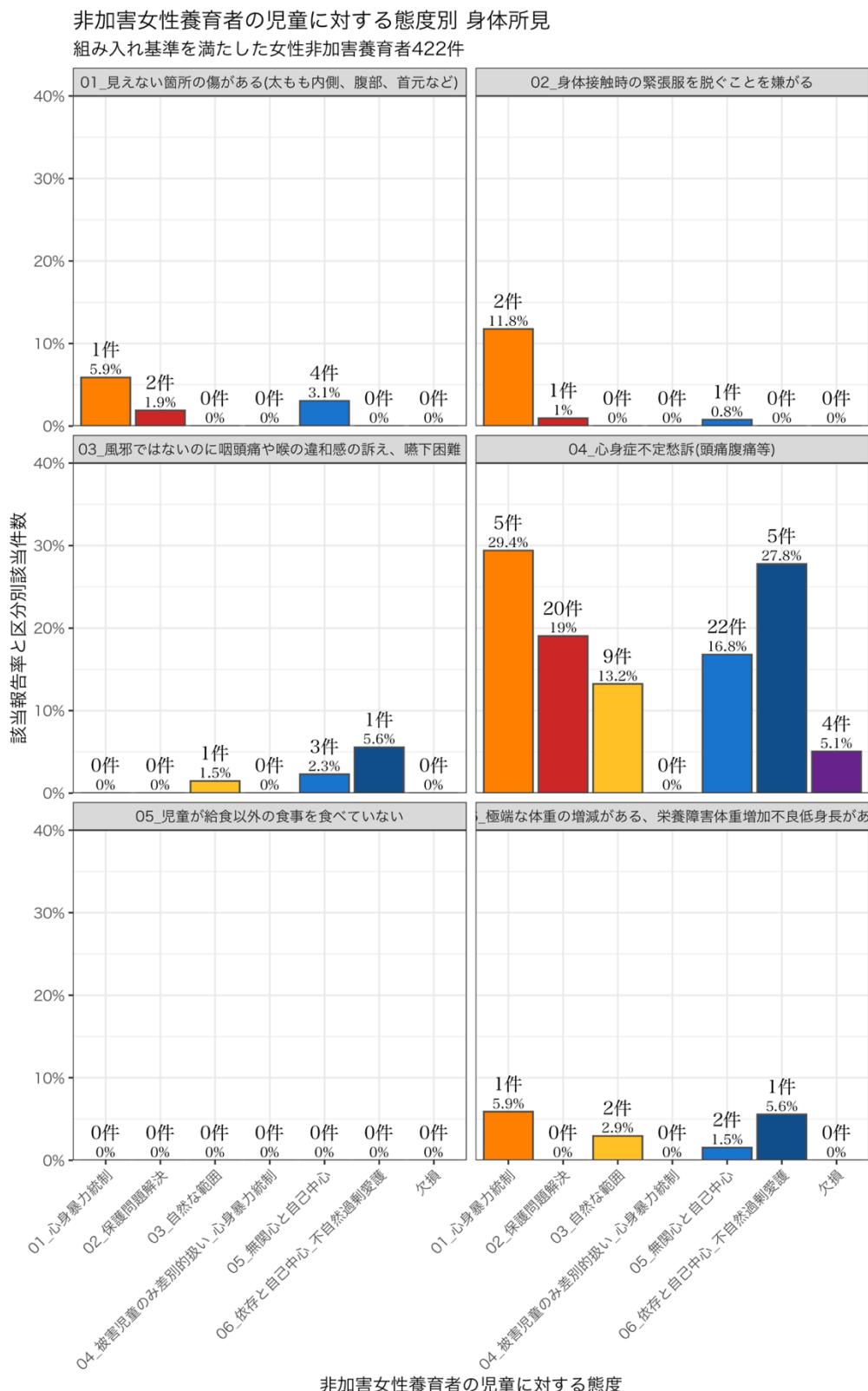


図 15.14 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 身体関連所見の該当報告率

対人関係や愛着に関する所見については、「子どもに情緒的問題がある」、「対人距離に関する問題がある」、「子どもが愛着課題を抱えている」の項目で、非加害女性養育者の被害児童に対する

る態度が、「保護・問題解決」、「自然な範囲」と形容される場合に、それぞれの課題への該当率が、やや低い傾向が見受けられた(図 15.15)。子どもが性的被害を受けている場合であっても、非加害女性養育者の態度が肯定的・自然な範囲である場合には、当該課題が発生しにくくなるといった可能性が推測される(または、非加害女性養育者の態度が肯定的・自然な範囲でない場合に、より上記課題が生じやすくなると推測される)。

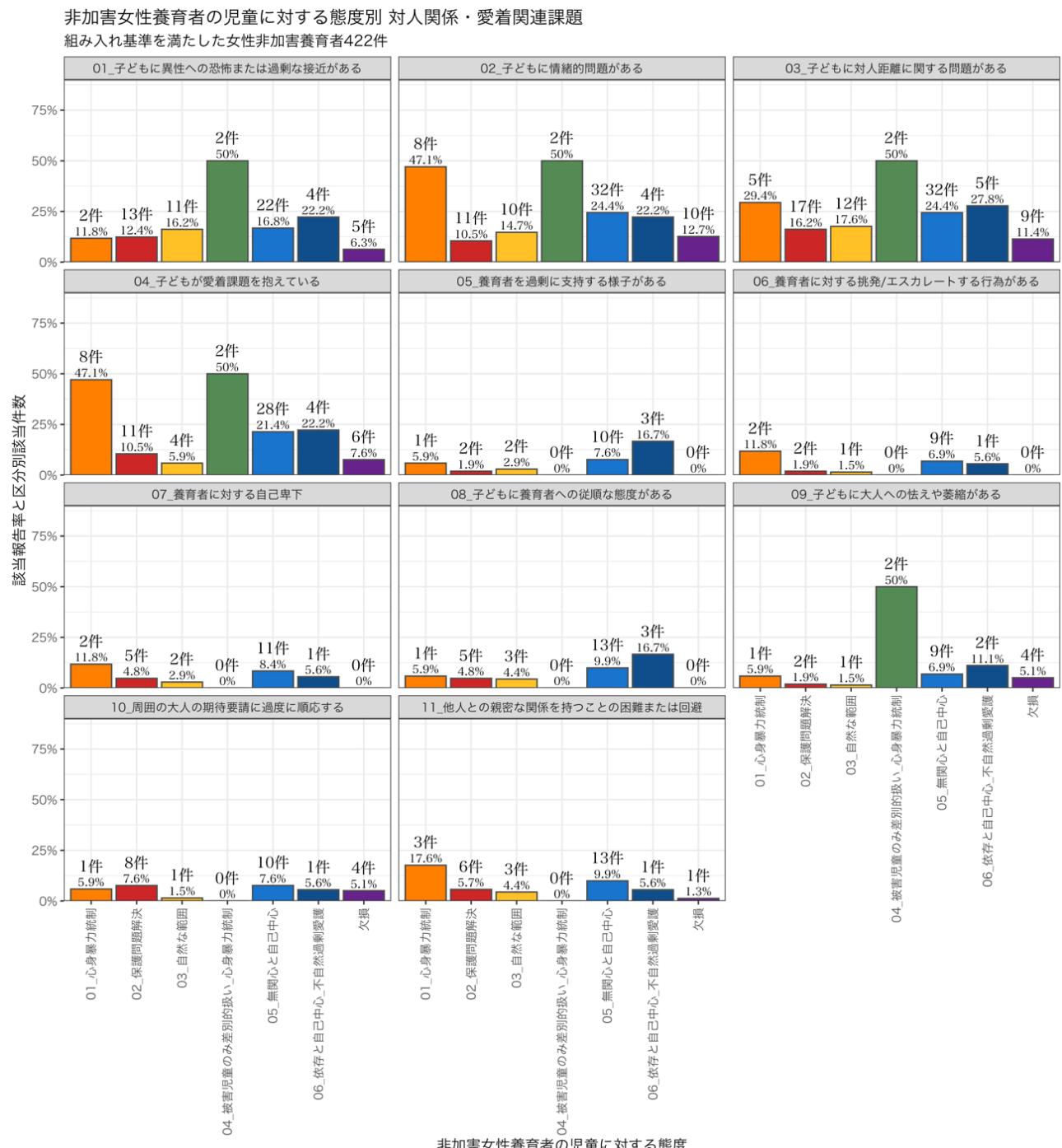


図 15.15 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 対人関係・愛着に関する課題

学校や保育園・幼稚園、あるいは社会的養護関係施設等での集団生活場面に関する所見については、非加害女性養育者の子どもに対する態度種別で、該当率に明確な違いは認められなかった(図15.16)。

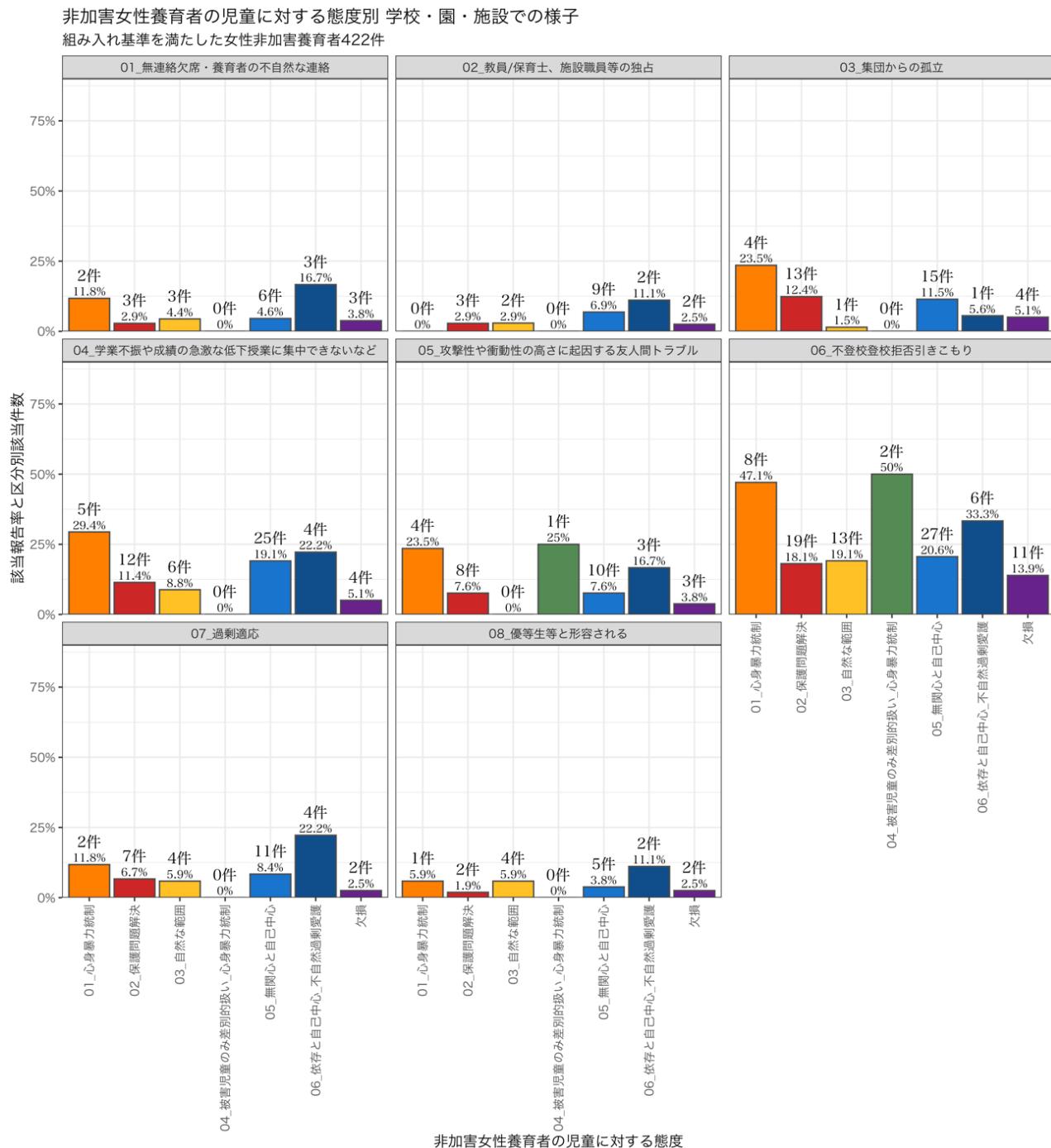


図 15.16 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 学校・園・施設等での所見該当率

関係者への訴えに関する所見については、非加害女性養育者の態度が肯定的・自然な範囲である場合と、否定的な場合において、該当率に明確な違いが認められなかった(図 15.17)。非加害女性

養育者の児童に対する態度によって、被害児童から発せられる帰宅不安や恐怖の訴え、保護救済の訴えといった援助要請に、顕著な違いが積極的に確認されなかつた結果となる。

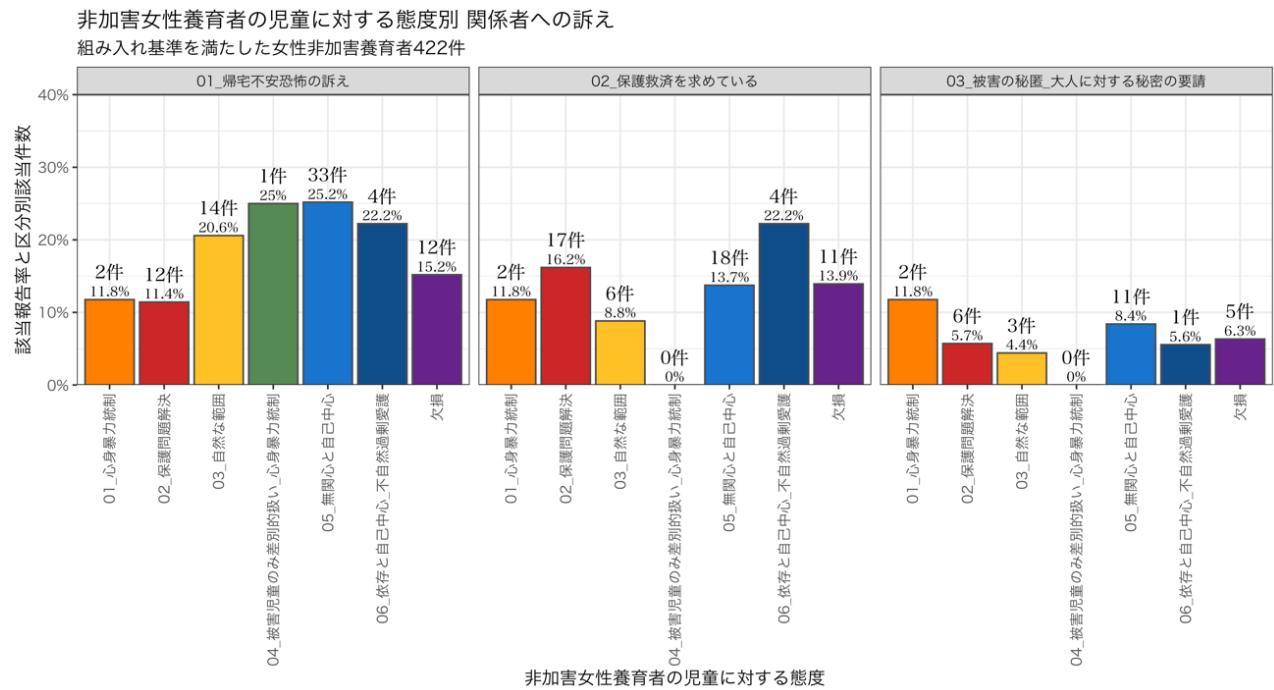


図 15.17 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 関係者への訴え

心理症状・トラウマ関連症状については、非加害女性養育者の態度が肯定的・自然な範囲である場合、否定的な態度と比べて「無力感」への該当率がやや低い様相が観察されるものの、全体を通じて一貫した傾向は特別確認されなかつた(図 15.18)。

非加害女性養育者の児童に対する態度別 心理トラウマ関連症状

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

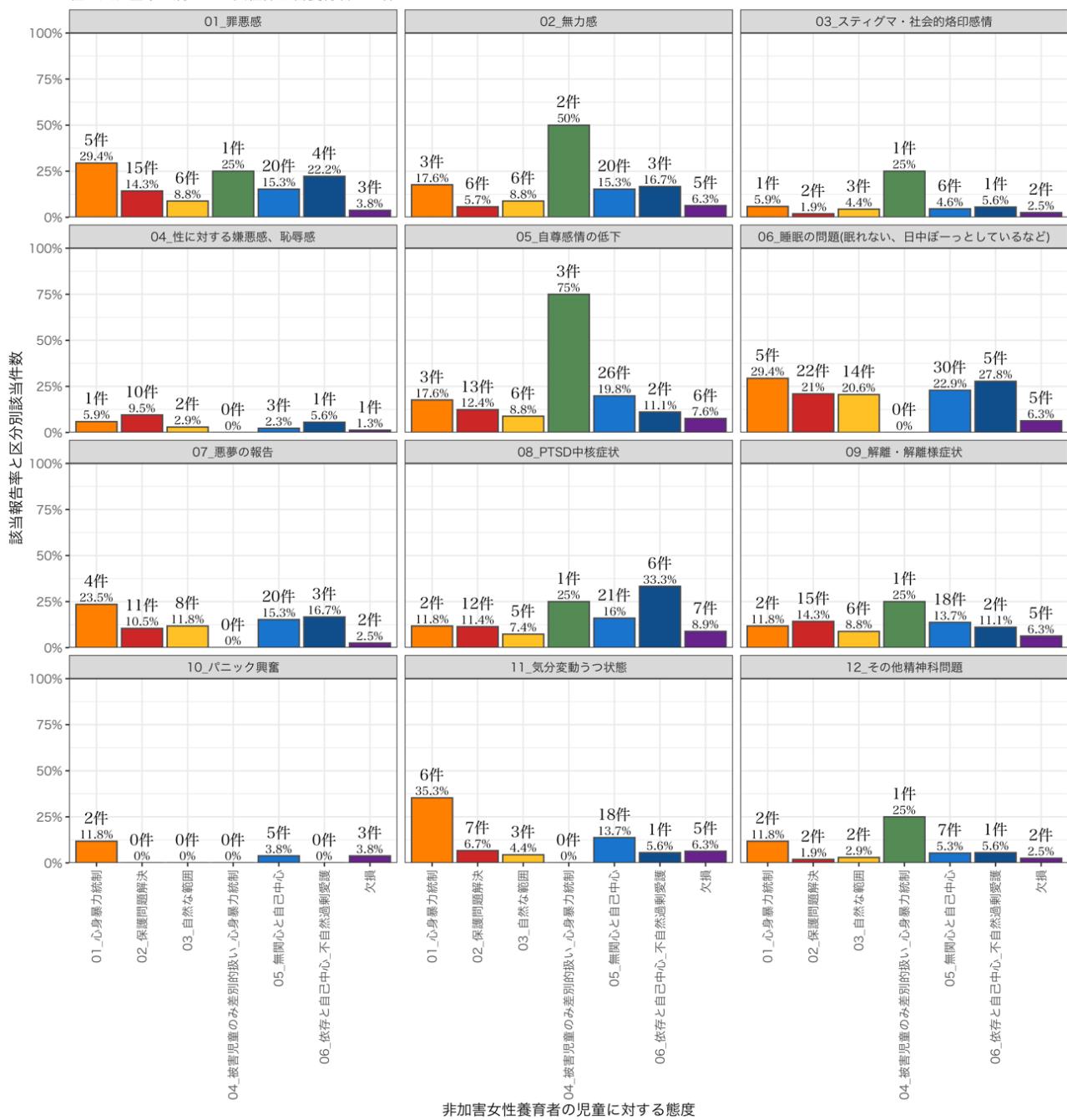


図 15.18 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 心理・トラウマ関連症状

被害児童にみられる行動上の特徴や問題についても同様に、非加害女性養育者の態度による該当率の明確な違いは観察されなかった(図 15.19)。

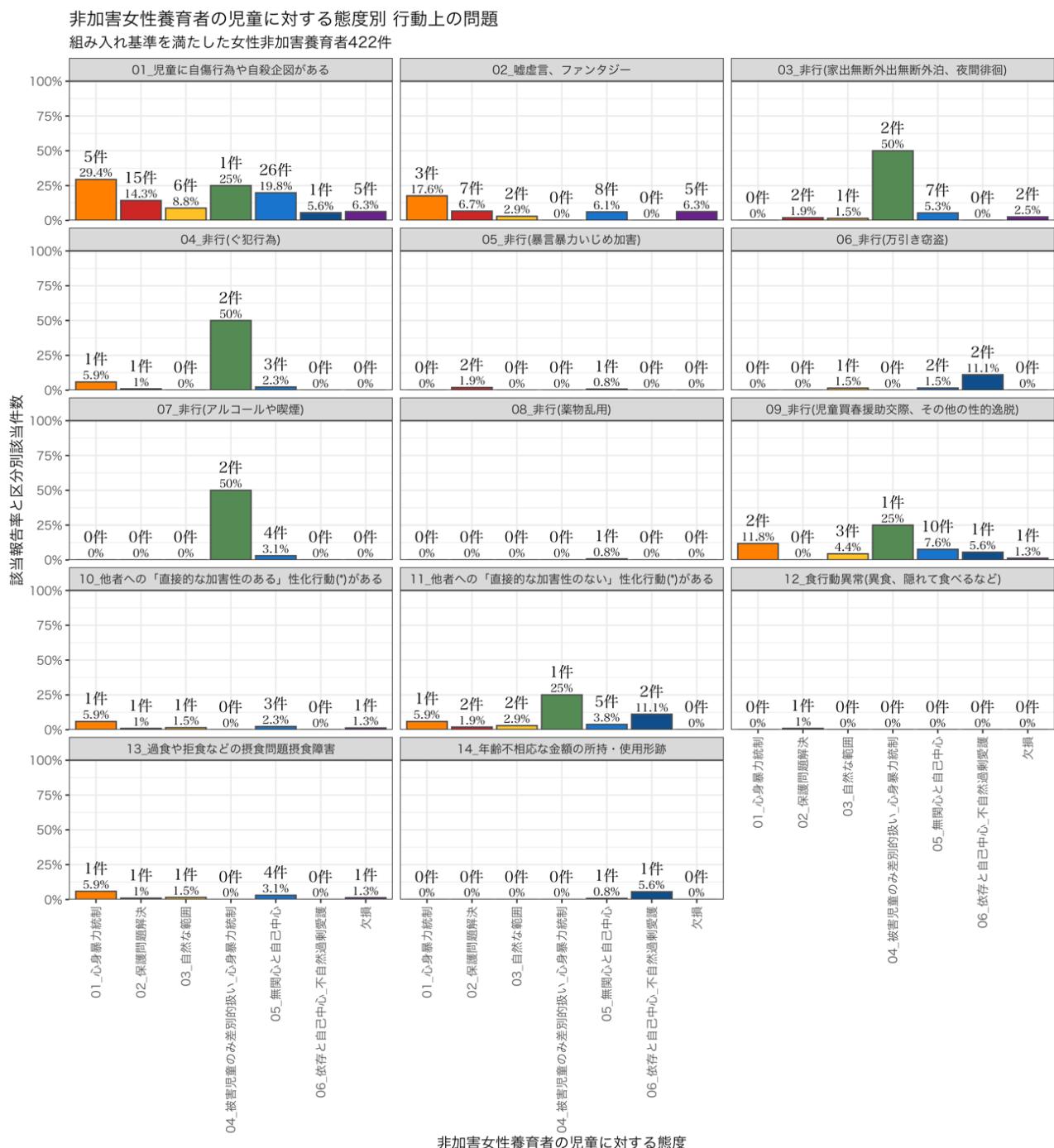


図 15.19 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 行動上の問題

続いて、非加害女性養育者の態度別で、「通告の実施に至った被害の発見者・開示相手」について、該当報告率を集計比較した。その結果、非加害女性養育者に「保護・問題解決」の態度がある場合に、発見または開示に基づく母(実母・実母以外の母)からの通告実施が、他の態度種別と比べて高い傾向が観察された(図 15.20)。

非加害女性養育者の児童に対する態度別被害内容

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

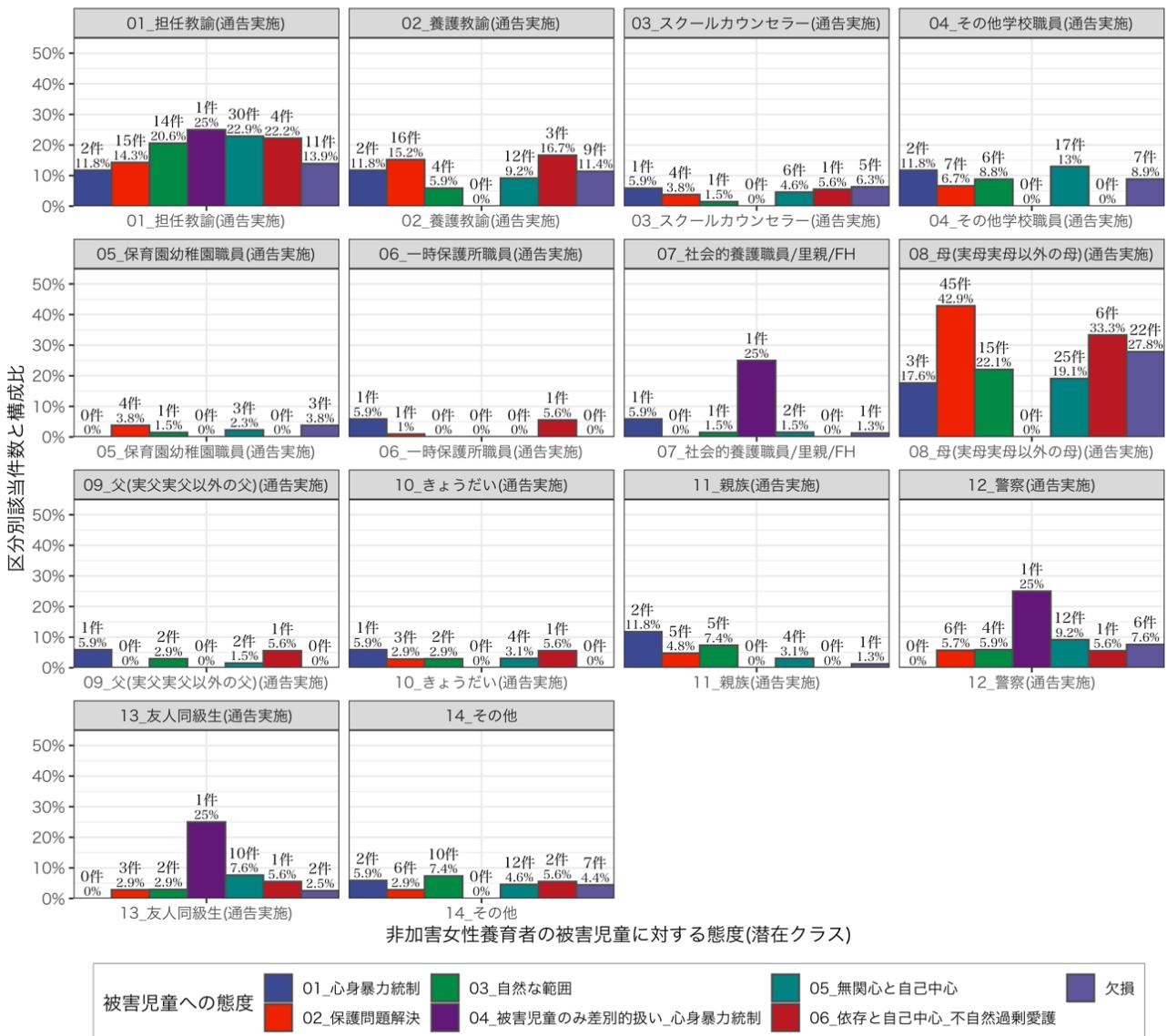


図 15.20 非加害女性養育者の児童に対する態度別 被害の開示相手・発見者(通告に繋がった者)

通告に至らなかった発見者・開示相手についての該当報告率に関しては、非加害女性養育者の態度によって明確な違いが観察されなかった(図 15.21)。

非加害女性養育者の児童に対する態度別 通告に至らなかった発見者・開示相手
組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

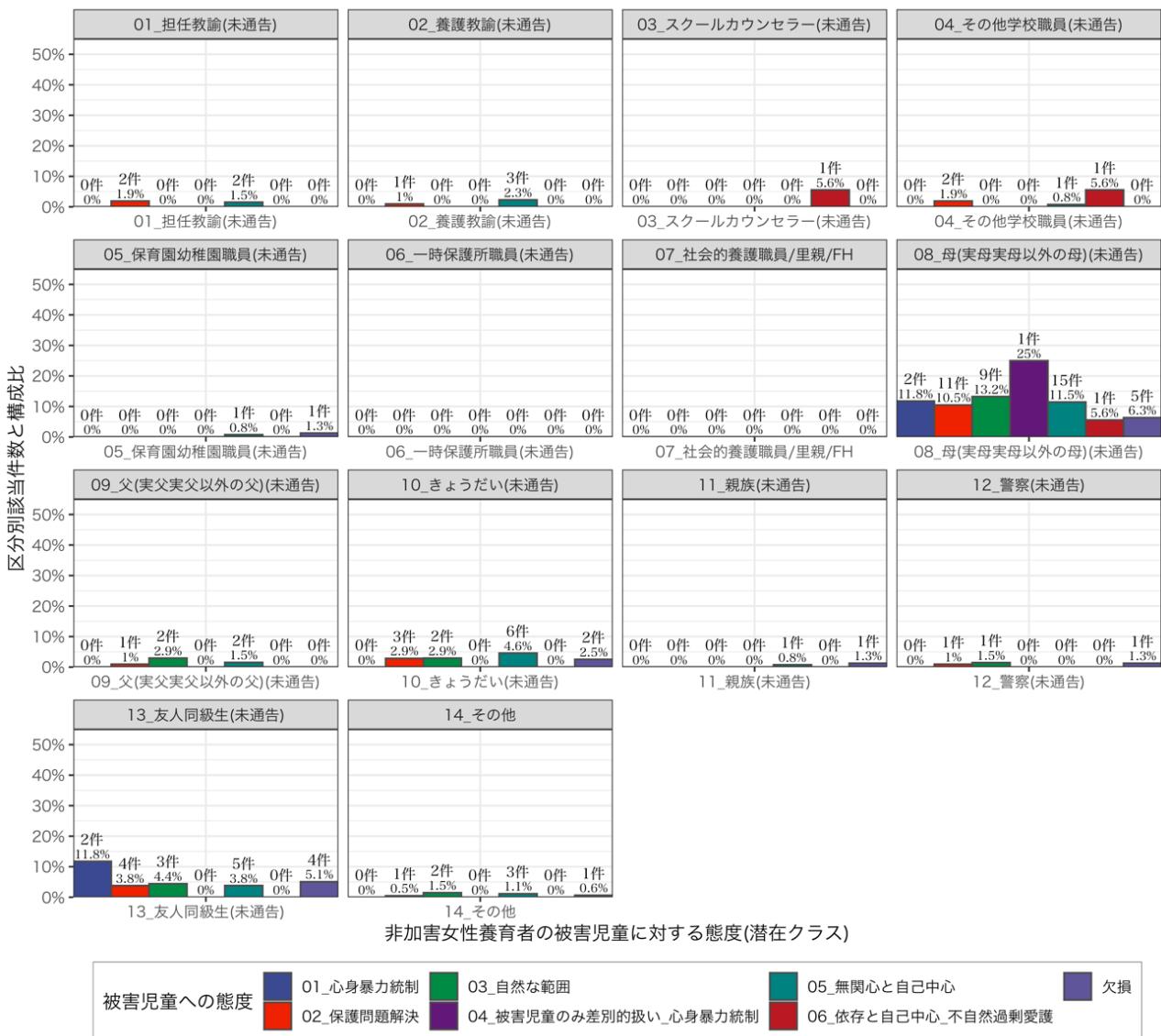


図 15.21 非加害女性養育者の子どもに対する態度別 被害開示相手・発見者(通告に至らなかった者)

15.3.4 非加害女性養育者に対する子どもの評価・感情別での特徴把握

ここまで、非加害女性養育者の態度種別で各種所見への該当率を比較してきた。このとき、「支援者の視点から、非加害女性養育者が被害児童に対して、どの様な態度を取っているか」という視点は重要であることに違いはないものの、被害児童に見られる所見との関連を検討する上では「子どもが、非加害女性養育者に、どの様な感情や評価を抱いているか」という子ども側の視点も欠かすことはできない。本節では、潜在クラス分析によって要約された「(非加害)女性養育者に対して被害児童が抱く評価・感情」の種別を集計軸として、各種所見の該当率を比較する。

非加害女性用養育者に対する被害児童の評価・感情の種別における、被害児童の被害発覚時点(受理時点)年齢を比較した結果を図 15.22 に示す。種別での平均値を比較したところ、「保護と好意、健全な愛着」と形容される評価・感情区分において、平均年齢が低い傾向が観察された。

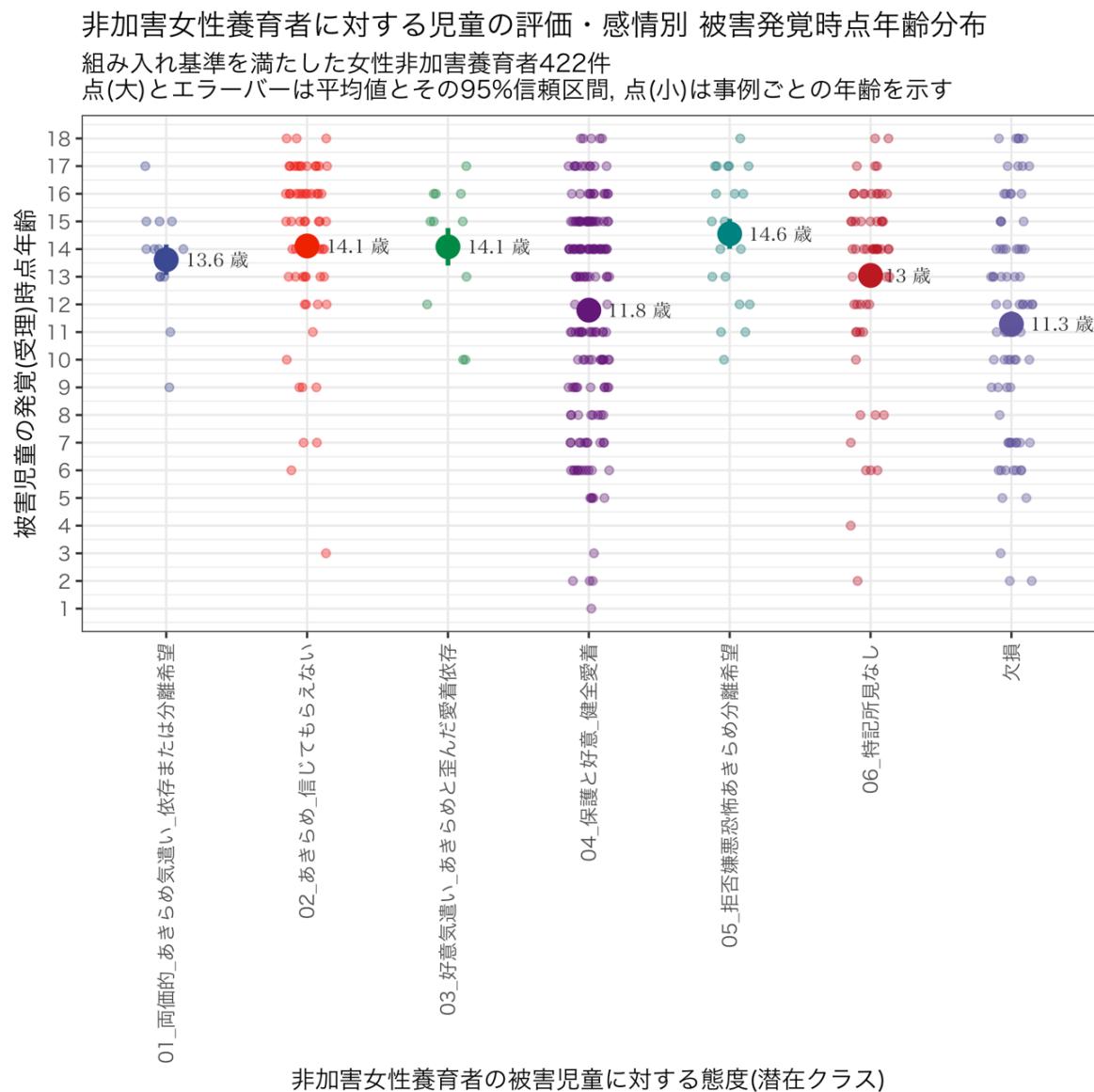


図 15.22 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 被害発覚時点の児童の年齢

続いて、被害の継続年数について、平均値を比較した結果、「保護と好意、健全な愛着」と形容される評価・感情区分において、被害継続年数が最も短かった(図 15.23)。解釈上、被害発覚時点の平均年齢が低いことと関連している可能性が指摘されうる。なお、被害継続年数の算出にあたっては、被害の初発年齢が把握・報告された 310 件の事例情報を使用し、欠損が生じた 112 件の情報は集計から除外している。

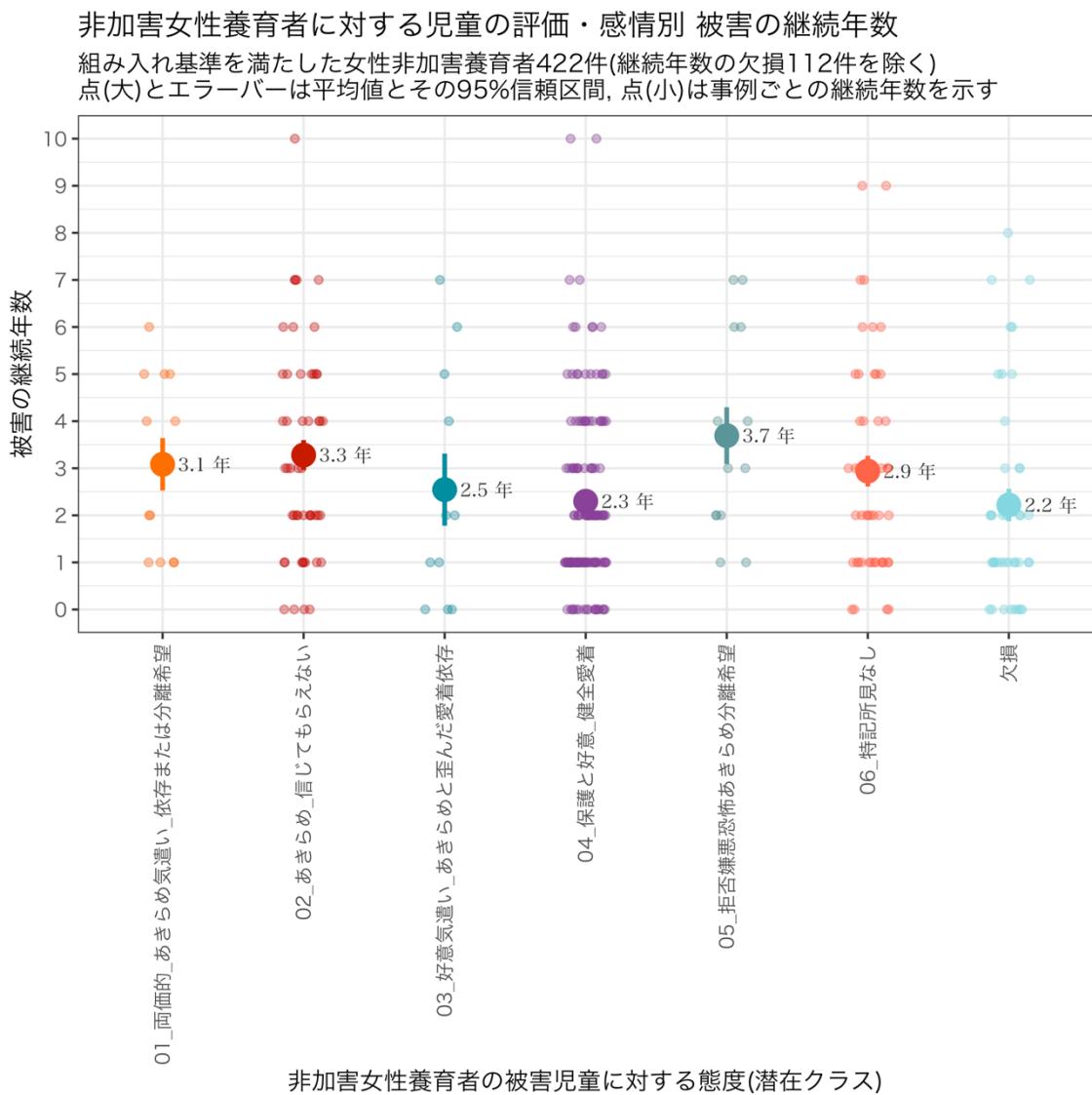


図 15.23 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 被害の継続年数

続いて、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情の種別で、被害内容の該当率を比較した。その結果、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情の種別で、被害内容に特筆すべき違いは観察されなかった(図 15.24)。

非加害女性養育者に対する児童の評価・感情別 被害内容

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

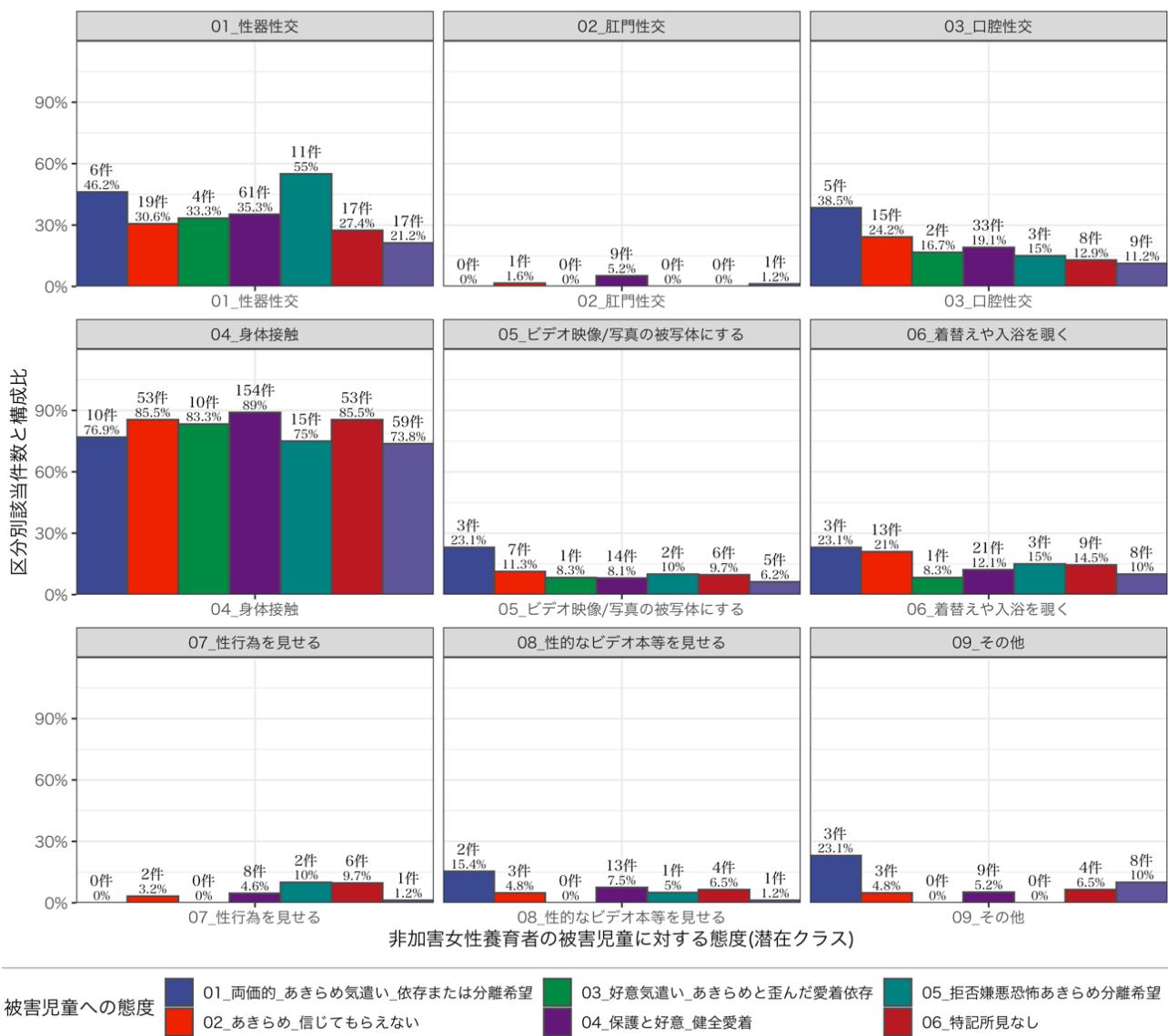


図 15.24 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 被害内容

被害児童に見られる所見について、「無症状」と「医学所見」の該当状況を整理する。非加害女性養育者に対する評価・感情の種別で該当率を比較したところ、「好意や気遣い、あるいは、あきらめと歪んだ愛着・依存」と「保護と好意、健全な愛着」と形容される種別において、無症状の該当率が、他の否定的評価・感情に相当する区分と比べてやや高い傾向が観察された(図 15.25)。

非加害女性養育者に対する児童の評価・感情別 無症状・医学所見
組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

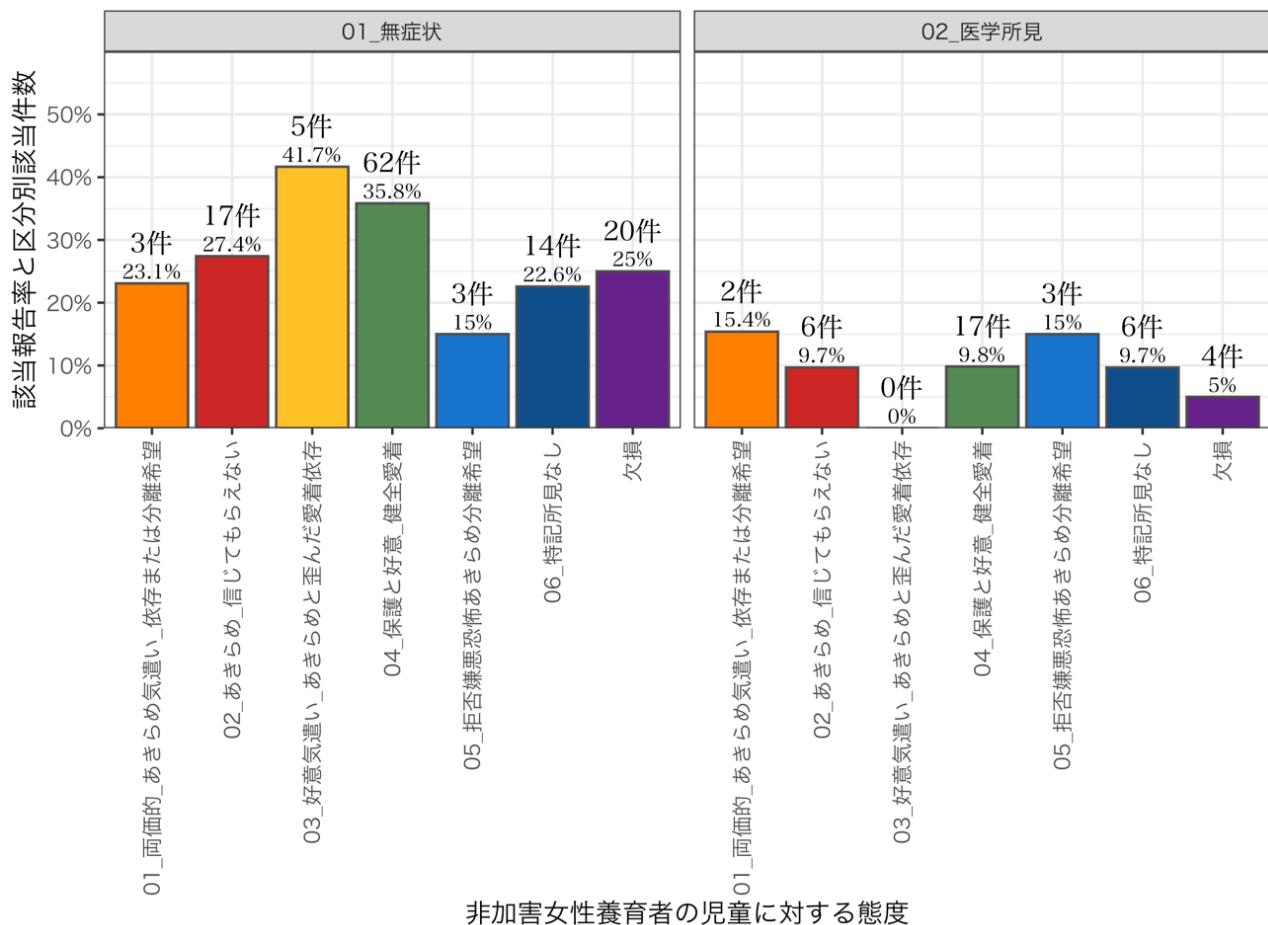


図 15.25 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 無症状・医学所見の該当状況

身体関連所見では、心身症・不定愁訴(頭痛・腹痛等の訴え)への該当率が、「両価的、あきらめや気遣い、依存や分離希望」といった複雑な感情を抱く場合に高い傾向が観察されたが、その他には明確な違いは認められなかった(図 15.26)。

非加害女性養育者に対する児童の評価感情別 身体所見

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

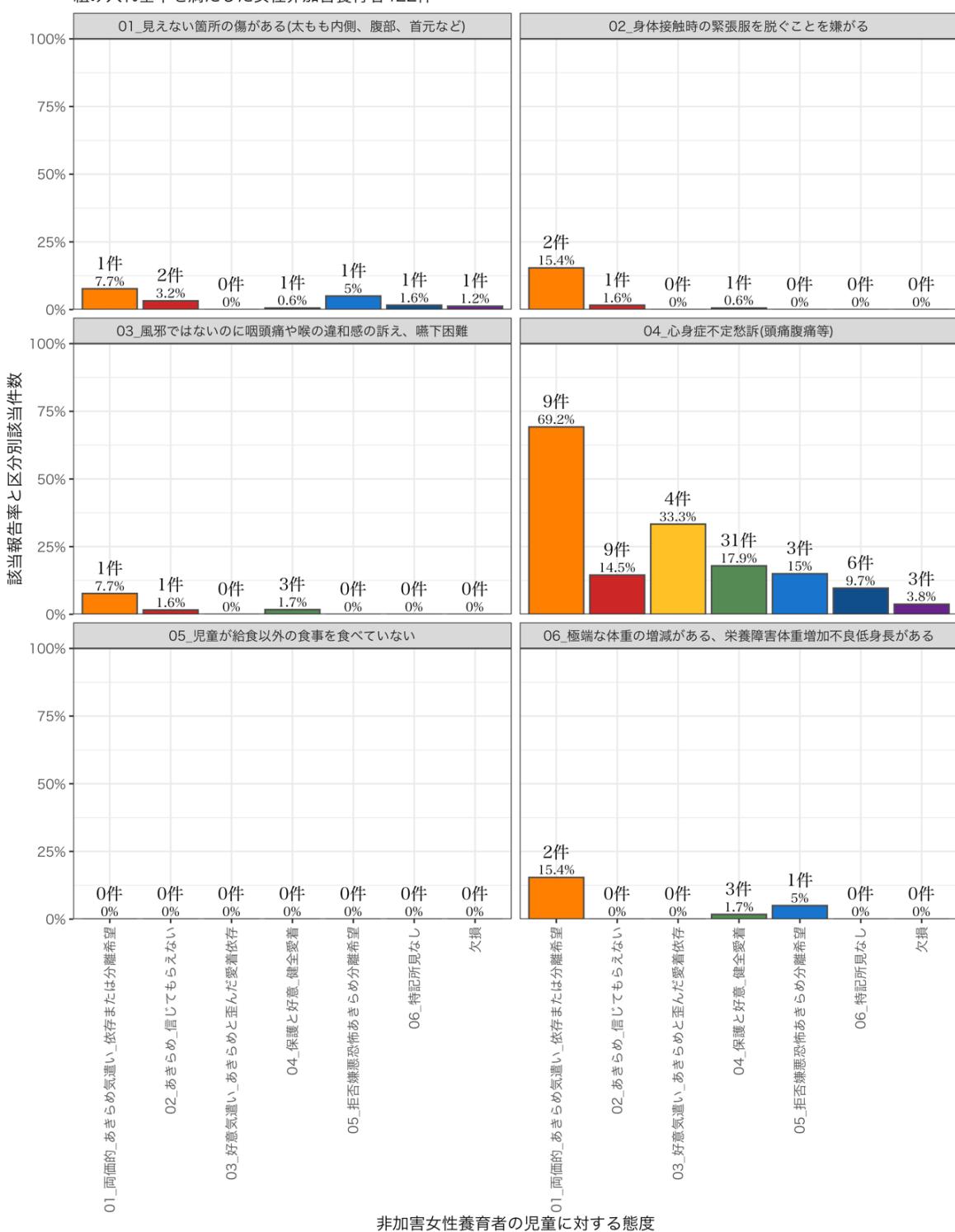


図 15.26 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 身体関連所見の該当状況

対人関係・愛着関連所見に関する該当状況について、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情種別別で比較したところ、「保護と好意、健全な愛着」を抱いている場合に、「子どもに

「情緒的問題がある」項目への該当率が、他の区分と比べてやや低い傾向が観察された。その他の所見項目については、一貫した傾向の違いは認められなかつた(図 15.27)。

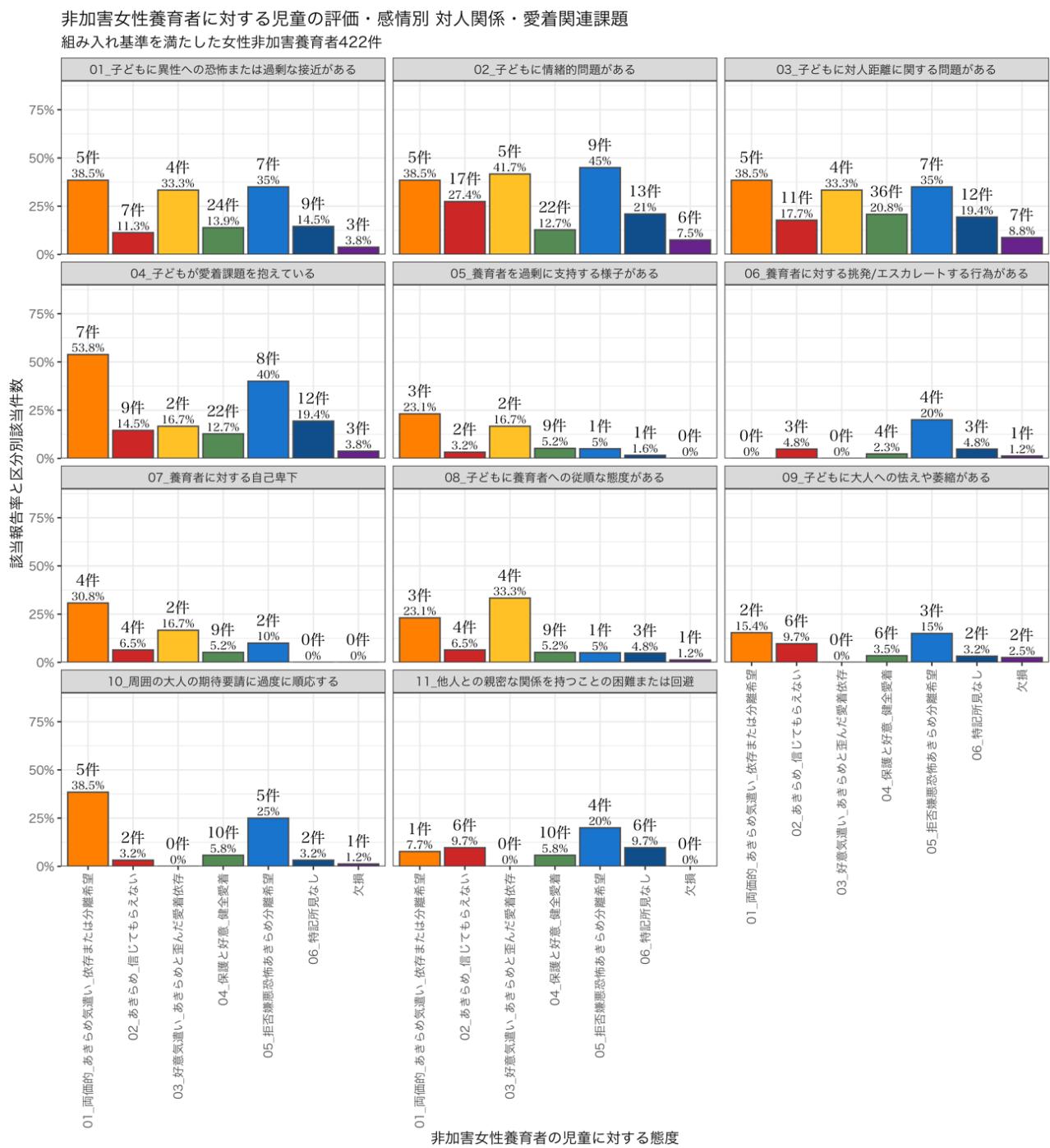


図 15.27 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別
対人関係・愛着関連所見の該当状況

学校や保育園・幼稚園、施設等の集団生活場面における所見では、「保護と好意・健全な愛着」と形容される評価・感情を非加害女性養育者に対して抱いている区分において、「不登校・登校拒否・引きこもり」への該当率が低い傾向にあった(図 15.28)。「保護と好意・健全な愛着」を非加害女性養育者に対して抱いている区分において、子どもの平均年齢は低い傾向にある(図 15.22)。不登校等への該当率は、区分に含まれた被害児童の年齢(未就学児童が相対的に多いこと)に起因したものである可能性があると考えられる。

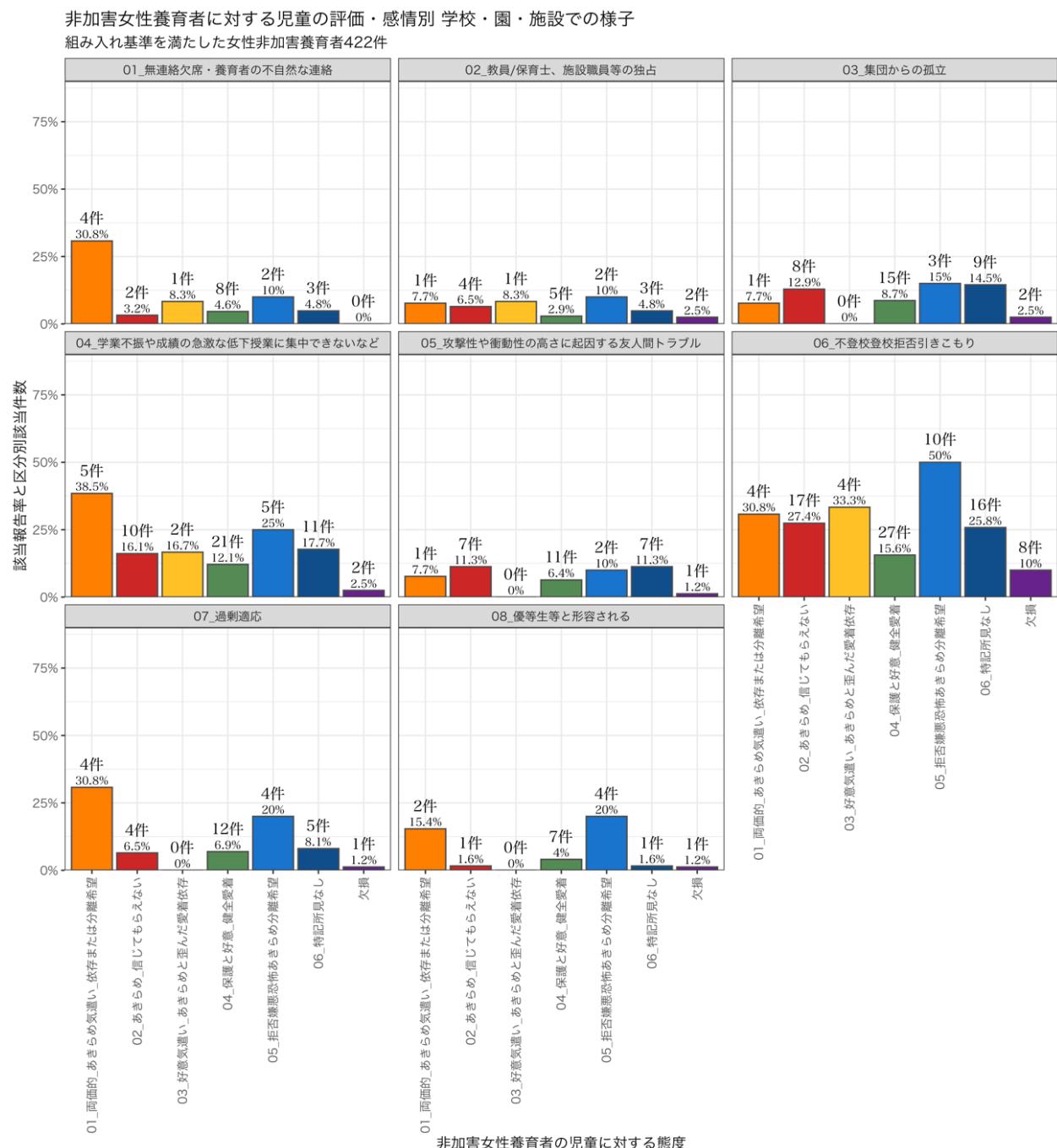


図 15.28 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 学校・園・施設等での様子

関係者への訴えに関する所見では、非加害女性養育者に対して児童が抱く感情が「保護と好意・健全愛着」や「特記所見なし」の種別区分である場合において、「帰宅不安・恐怖の訴え」への該当率がやや低い傾向が観察された(図 15.29)。また、非加害女性養育者に対して、「拒否嫌悪・あきらめ・分離希望」といった否定的な評価・感情が抱かれる場合、「保護・救済を求めている」への該当率が高い傾向が観察された。

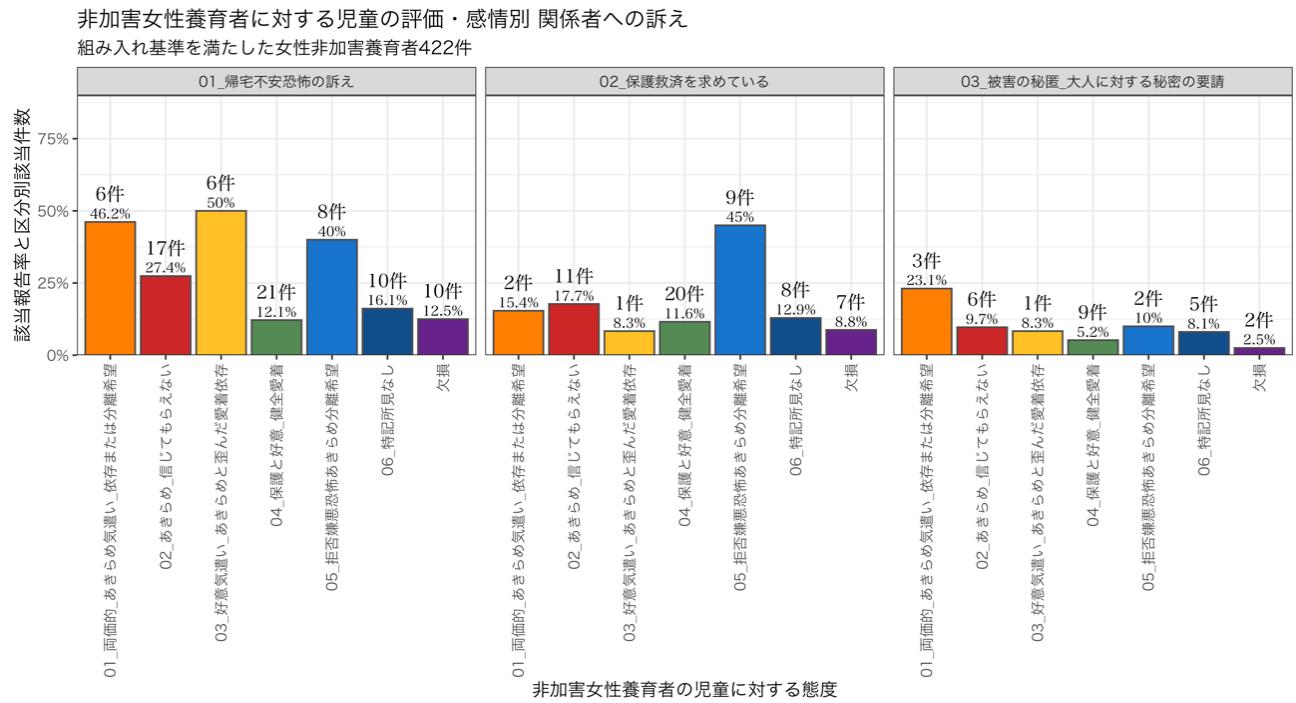


図 15.29 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 関係者への訴え

心理・トラウマ関連症状については、非加害女性養育者に対して子どもが抱く感情が「保護と好意・健全愛着」や「特記所見なし」の種別区分である場合において、「無力感」や「自尊感情の低下」への該当率が、やや低い傾向が観察されたものの、全般的に見て大きな違いは見受けられなかった(図 15.30)。

非加害女性養育者に対する児童の評価・感情別 心理トラウマ関連症状
組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

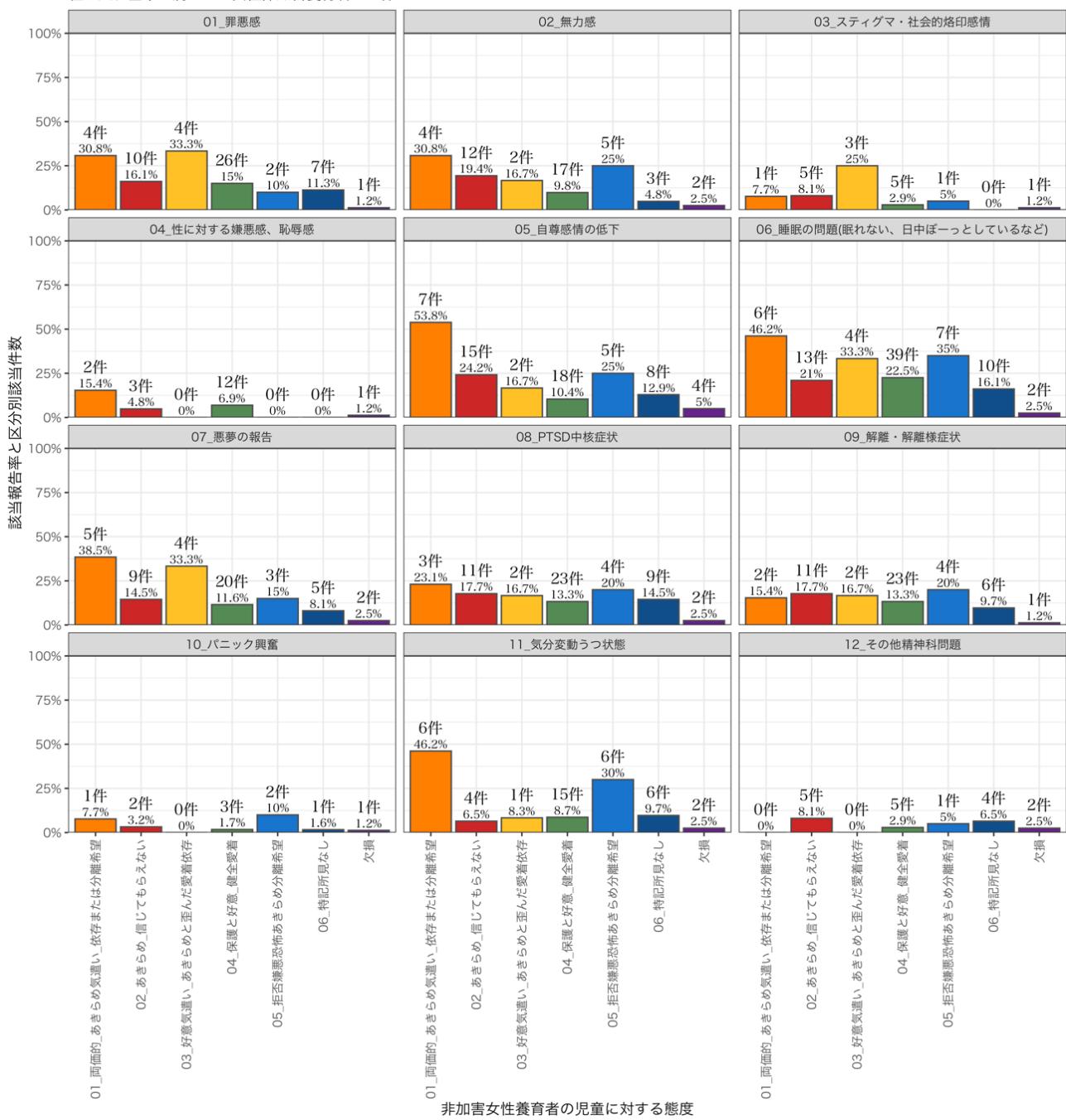


図 15.30 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 心理・トラウマ関連症状

被害児童の行動上の課題所見に関しては、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情の種別によって明確な違いが見受けられなかった(図 15.31)。

非加害女性養育者に対する児童の評価・感情別 行動上の問題

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

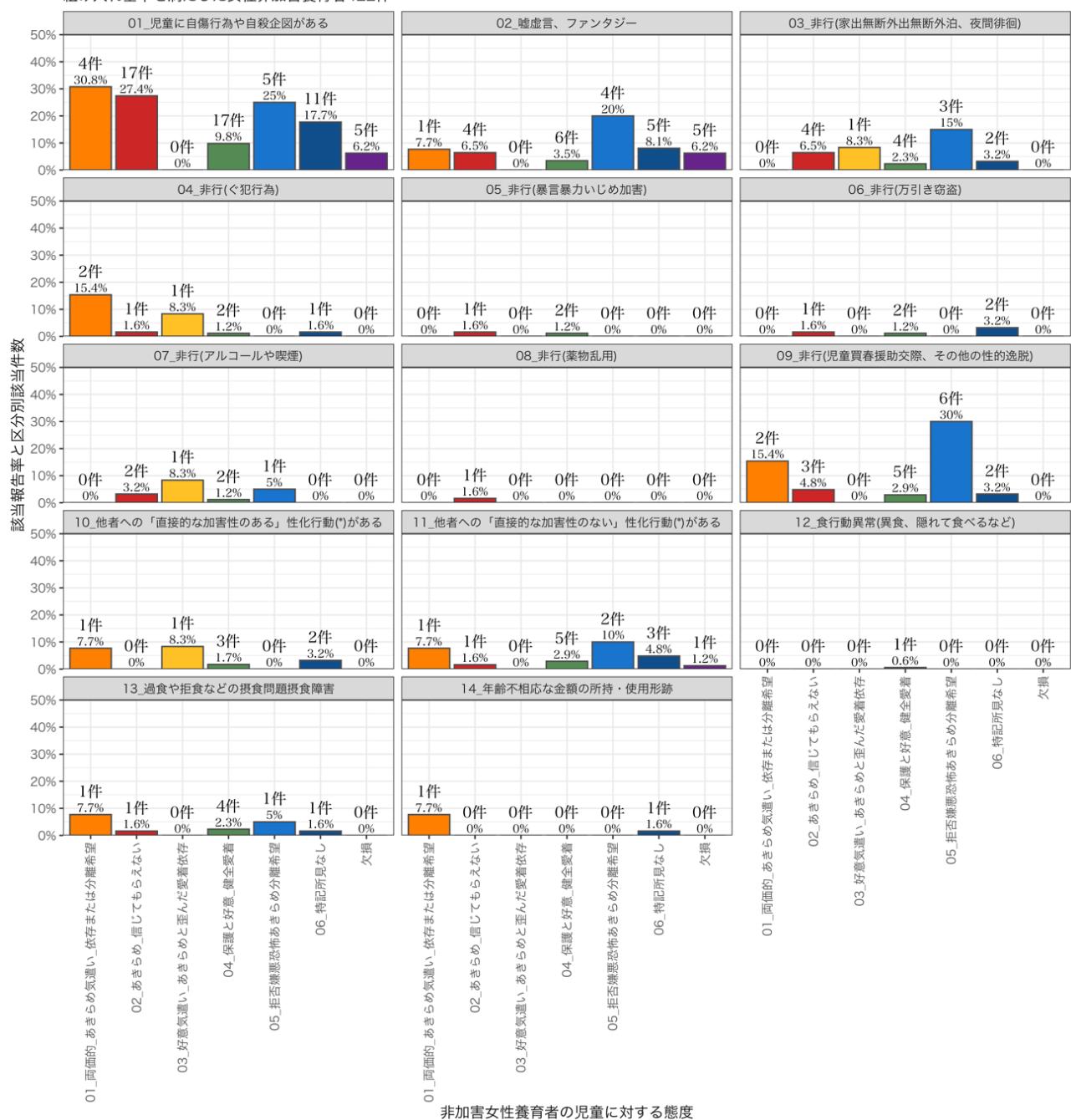


図 15.31 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別 行動上の課題所見

続いて、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別で、「通告の実施に至った被害の発見者・開示相手」について、該当報告率を集計比較した。その結果、「保護と好意、健全愛着」や「特記所見なし」の場合に、母(実母・実母以外の母)からの通告実施率が上位にあるものの、被害児童が抱く評価・感情の種別で、明確な違いは見受けられなかった(図 15.32)。

区分_女性養育者_被害児童の評価感情情報_LCA 通告に至った発見者・開示相手

組み入れ基準を満たした女性非加害養育者422件

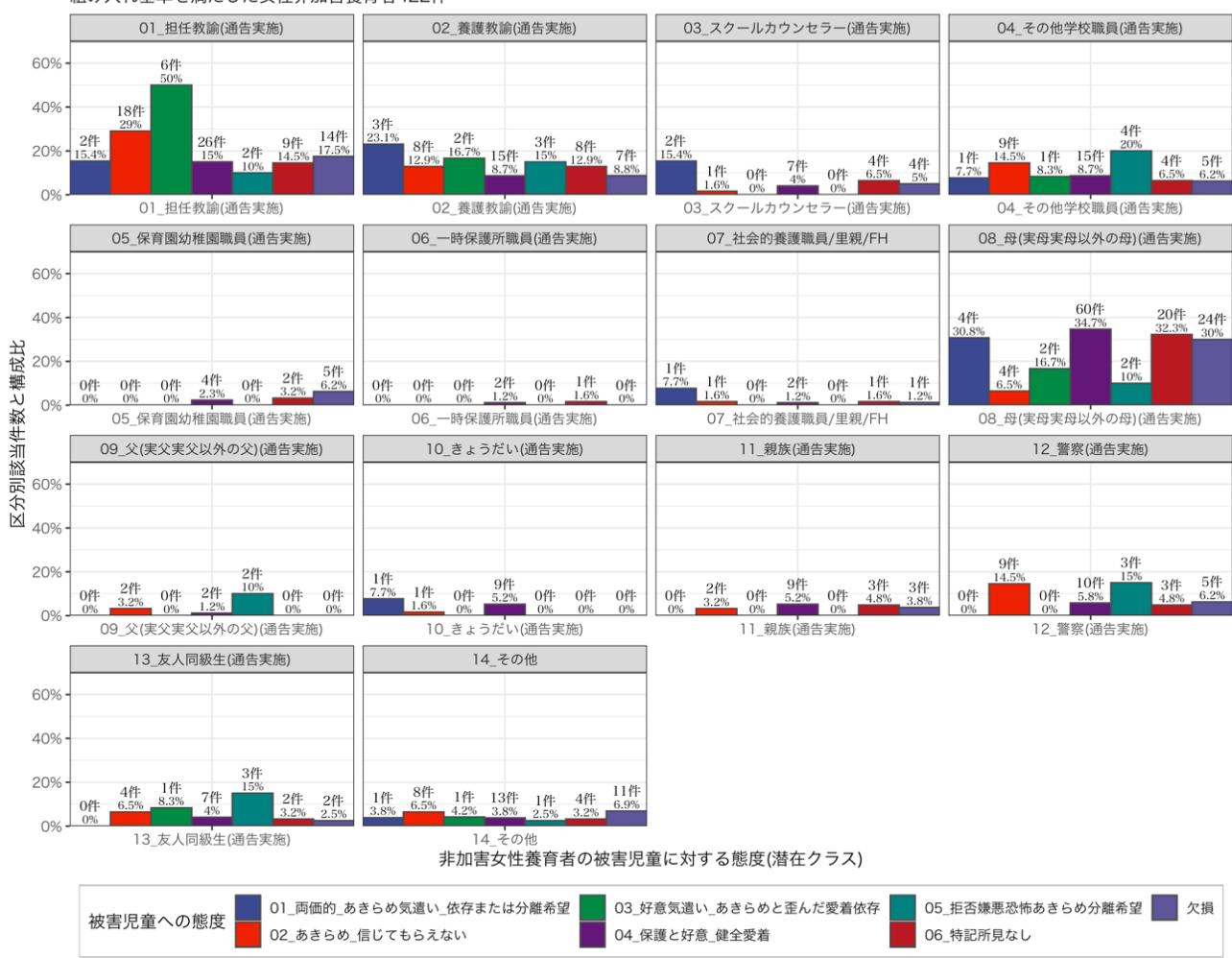


図 15.32 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別

被害の発見者・開示者(通告につながった者)

通告には至らなかった過去の開示相手や発見者についても同様に、非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別で該当率の明確な変化は得られなかった(図 15.33)。

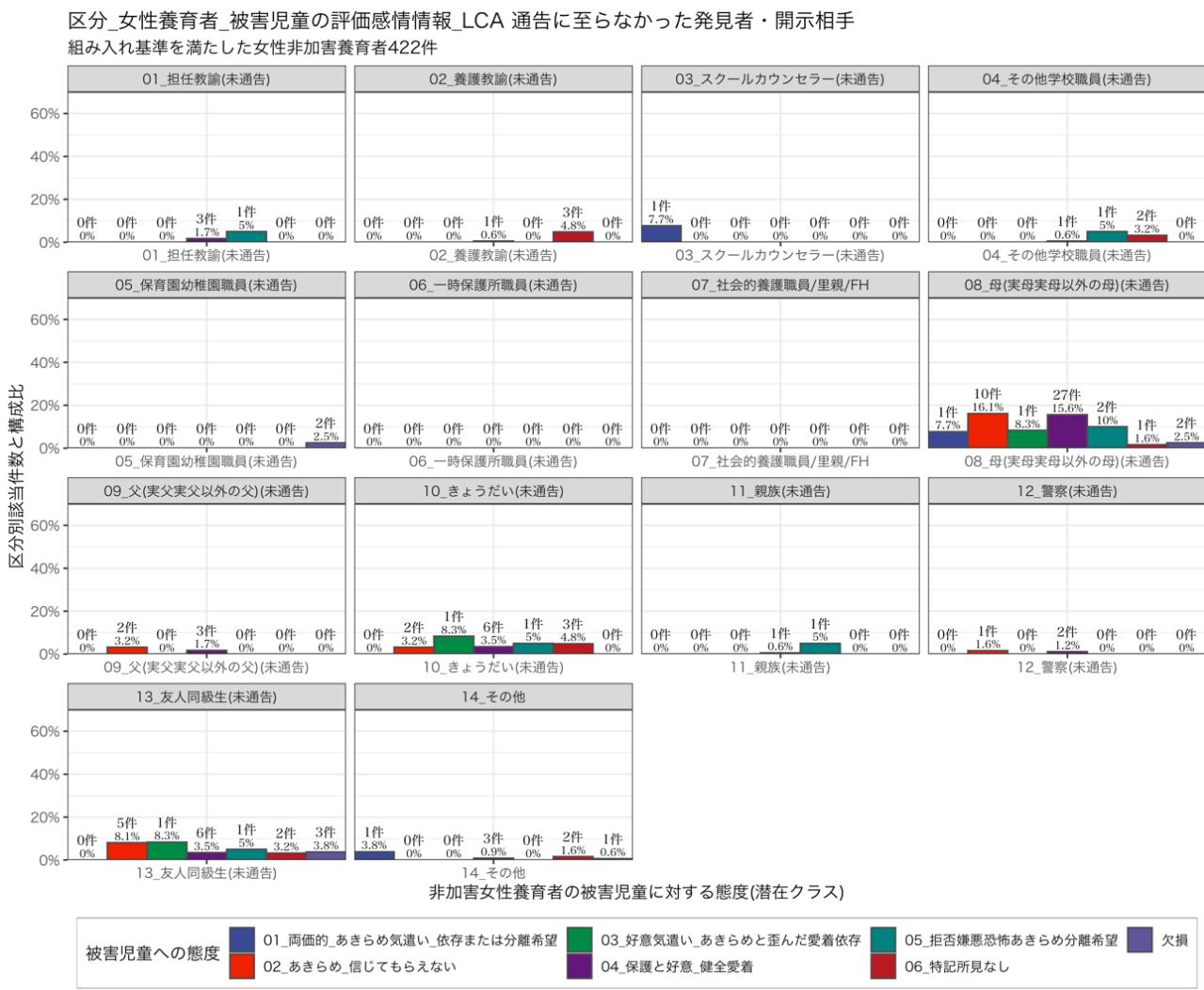


図 15.33 非加害女性養育者に対する被害児童の評価・感情別

被害の発見者・開示者(通告には至らなかった者)

15.4 考察

本章では、「非加害養育者」に該当報告のあった事例、特に「非加害女性養育者」に焦点をあてて、養育者の所見を軸に被害児童の特徴を集計した。その結果、「非加害」への該当報告があつた養育者においても、子どもに対する態度や、子どもの評価・感情、外部観察所見等において、多様な様相があることが認められた。

従来の研究では、非加害養育者の機能によって、被害を受けた子どもの予後や臨床所見に差異があることが報告されてきている(例えば、Hébert, Lavoie, & Blais, 2014)。その一方で、本章の基礎分析では、非加害女性養育者の振る舞いによって、一部の子どもの所見に違いが見受けられたものの、明確な差異や特徴は特筆して検出されなかった。当該結果には、いくつかの背景理由があるものと思われる。

第一に、本調査は横断データであり、長期的な予後との関連を検討していない。将来的な PTSD の発症など、時間的前後関係に関する視点が一切含まれないため、非加害養育者と子どもの臨床所見等の間にある関係性が十分には検討できていないものと考えられる。

第二に、非加害養育者の振る舞いと児童の各種所見との関連性については、様々な情報項目がデータとして得られているが、それぞれの影響度合い等を互いに調整した上での関連性等を解析的に扱っていない。様々な共変量(剩余変数)の影響が混在した結果、本来的に存在している関連性や違いが検出されていない可能性が多分に指摘される。

第三に、被害児童の臨床所見に関する「測定」にも、不十分さがある。例えば、抑うつ症状や PTSD 症状等の測定を検討するにあたっては、妥当性・信頼性等の確認された臨床尺度の利用や、医師による診断等の妥当性の担保されうる測定が必要になる。

これらの課題点を踏まえれば、本章の結果は、非加害養育者の機能と被害児童に見られる各種所見の関連性を検討するにあたっての、「初期段階の概況把握」に相当する位置付けにとどまり、何らかの結論を導く段階には至っていないと捉えるのが妥当だと言えるだろう。

また、被害児童の各種所見との関連性という文脈から捉える「非加害養育者の機能」には、子どもに対する態度や子どもからの評価・感情だけでなく、他にも様々な要素が取り上げられる必要があるだろう。すなわち、「被害を受けた子どもの各種所見と関連しうる、非加害親の機能とは何か?」といった根本的観点から、調査測定を見直す必要があるかもしれない。

さらに、本章では事例データのサイズが十分でないことから、「非加害男性養育者」に関する基礎集計がかなわなかった。非加害男性養育者に関する分析は、当該事例における加害者の種別から、主にきょうだい間での性的問題事例の特徴把握に貢献すると考えられる。本章で得られた各種集計結果は、今後の調査や研究を検討する上での基礎情報としての活用が期待される。

本章の各種集計では、「非加害養育者といつても、それぞれの事例でその様相は様々に異なっている」ことは事実として把握されたが、それ以外に、被害児童の各種所見と明確に関連する要素等は十分に検討できなかった。しかし、当該総括とは独立して、被害児童への支援や予後の改善等を図る上で、非加害養育者の存在が重要な役割を担うことは、確かなものであると考えられる。非加害養育者が、「どのような苦しみや困難、課題を抱えており」、「どのような側面をどのように支援すれば」、「子どもにどのような肯定的な影響があるのか」といった視点も含めて、研究を進めてゆく必要がある。